

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ち しんかん しっこう しんしゅうひんてん てんじ
平成知新館1F-6(漆工)の「新収品展」に展示されている作品について勉強してみよう。

おく
愛するひとへの贈りもの？

はさみが入ったこのいれもの(図1)、なんだかわかりますか？いれものにはたくさんの穴があいています。はさみのほかに、細かな道具を差しこめるようになっているんですね。蓋と身があわさるところには、両わきに小さな輪っかがついています。この輪っかは蓋にもついていて、ここにかつて紐を通していました。じつはこれ、おさいほう道具を入れて腰からぶらさげて持ちこぶためのいれもの、つまり、携帯用のおさいほう道具入れなんです。

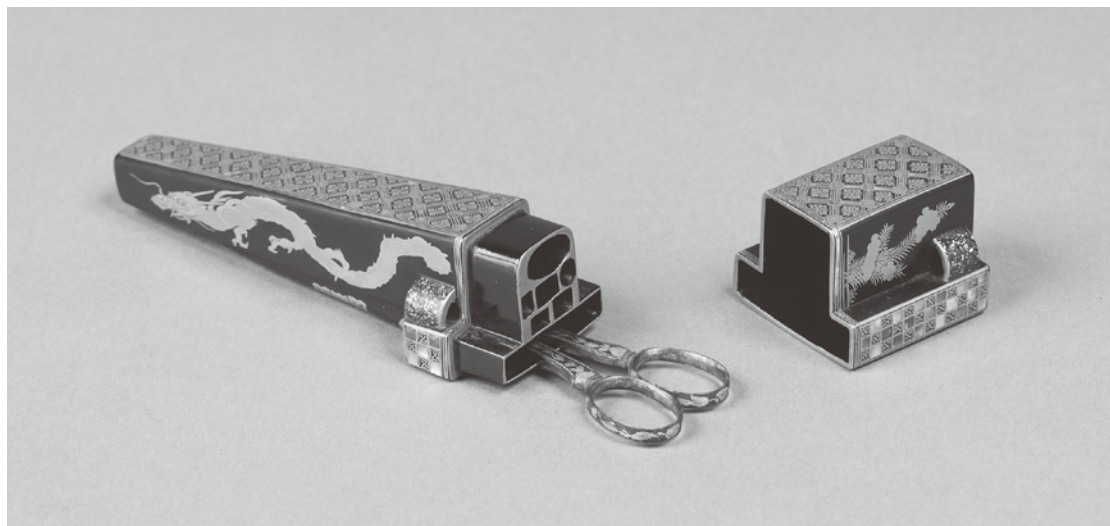


図1 双龍花鳥蒔絵螺鈿裁縫道具入 江戸時代(17世紀) 京都国立博物館蔵

このいれものは、400年ぐらい前の日本でつくられました。木でつくって、漆をぬって、金粉や貝をはりつけて、ちょっとユーモラスな龍や、虎(図2)やお花をえがいてかざってあります。でも、こんな漆器のおさいほう道具入れは、ほかに見あたりません。江戸時代のお嬢さまたちも持っていませんでした。この形は、なんと、オランダのお金持ちの奥さまのためにつくられた特注品らしいのです。どういふことでしょうか？



図2 双龍花鳥蒔絵螺鈿裁縫道具入 部分

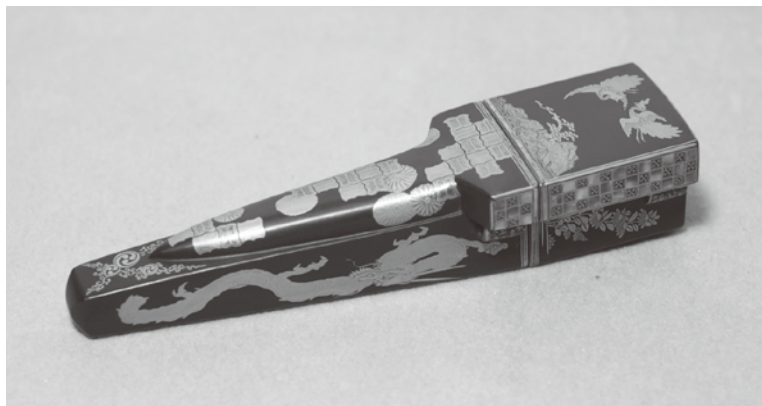
表面をかざる龍やお花は、蒔絵という技法で

かざられています。ウルシの樹^きからとれるネバネバした液体^{えきたい うるし}（漆）を接着剤^{せつちやくざい}としてつかって、金をくいだいた小さな粒^とをはりつけて、研^といだりみがいたりする技法^{ぎほう}です。この蒔絵^{まきえ}は、日本でしかつくられていませんでした。にじ色^{らでん}にひかる貝^{らでん}をはりつけるのは螺鈿^{らでん}という技法^{ぎほう}で、こちらはアジアのほかの国でもつくられていました。でも、蒔絵^{まきえ}との組み合わせとなると、日本でしか手に入りませんでした。

400年前の日本には、ヨーロッパの商人が船に乗ってぞくぞくとやって来ていました。ヨーロッパにはニス^{ニス}はありましたが、ウルシ^{うるし}はありませんでした。ニスはお湯やアルコールをかけるといたんでしまいますが、漆ぬりのお椀^{わん}は、お湯でもアルコールでも、塩でも酸^{さん}でも入れられます。ヨーロッパから来たひとたちが、日本の漆器^{しつ き}を目にして、もっともかんげきしたのは「お湯を入れてもなんともない！」という点だったようです。そのうえ、美しい蒔絵^{まきえ}でえがかれた絵はこすっても消えず、にじ色の螺鈿^{らでん}といっしょにいつまでもかがやいているとあって、蒔絵^{まきえ}と螺鈿^{らでん}の組み合わせは大人気となりました。ヨーロッパのひとたちの求めにおうじて、京都^{きょうと}の職人^{しやくにん}さんたちは、大きなたんすやトランクなどを蒔絵^{まきえ}と螺鈿^{らでん}でかざり、ヨーロッパからやって来た船乗りたちに売りました。これらはアジアのほかの港を経て、ヨーロッパの王族^{おうぞく}や貴族^{きぞく}、そして大金持ちの大商人たちに向けて輸出^{ゆしゆつ}されていったのでした（インドやタイの王族、アメリカ大陸にくらしたヨーロッパ人たちにも大人気の商品でした）。

そんな商いをしていた船乗りたちにとって、商売をスムーズに行うために、とちゅうの港を管理している王国や、自分の国のえらいひとたちへの贈り^{おく}ものは欠かせないものでした。船乗りたちがつとめた会社の本社の重役の名前を、壁^{かべ}にかざる大皿^{たい}や楯^{たて}などに蒔絵^{まきえ}でかいた例もあります（ごますりですね！）。気の利いたプレゼントは、商品とは別に、特別に注文して一点だけつくられるものでした。このさいほう道具入れもそのように特別につくったものだったようです。

17世紀のオランダでは、大きな家の奥^{おく}さまは、長いスカートにそって腰からくさり^{こし}をたらし、その先に、邪気^{じゃき}払いの匂^{にお}い玉^{だま}や家の鍵^{かぎ}やさいほう道具入れをぶらさげていたそうです。当時の絵にそのようにえがかれていますし、じっさいに銀^かや革^わでつくられたさいほう道具入れが伝わっています。しかし、蒔絵^{まきえ}と螺鈿^{らでん}でかざられた例は、いまのところこの作品しか知られていません。世界にひとつだけの特別のさいほう道具入れ。だれが、どんな女性^{じよせい}のために注文したんでしょうね。



(工芸室 永島明子)

図3 双龍花鳥蒔絵螺鈿裁縫道具入 裏面